

名古屋の女子教育の変遷

吉田あけみ*・藤原直子*・小倉祥子*

History of Girls' education in Nagoya

Akemi YOSHIDA, Naoko FUJIWARA and Shoko OGURA

はじめに

近年、若者たちの就職難を背景に教育の重要性が再認識され、キャリア教育の必要性が指摘されている。特に女性の能力の活用が注目されており、それにともない女子教育を担ってきた女子大学などでは、キャリア教育のさらなる拡充を試みている。また、18歳人口の減少にともなう受験生の減少に備え、各大学が自らの教育の理念を再確認し、自校の歴史を振り返る作業を加速させている。椋山女学園においても、大学内に椋山歴史文化館が開設され、これまでの学園の社会資本の整理などが試みられている。

女子に対する教育については、未整備の国が存在しているが、日本においてもかつては男女平等の教育がなされていたわけではない。勿論現在においても、完全平等が達成されているわけではないが、以前に比べれば女性に対する教育の機会は、男性とほぼ等しい状態になりつつある。ここに至るまでの経緯を振り返り、さらなる平等、さらなる女子教育の発展を検討する必要がある。そのためには、過去の女子教育の歴史を整理し、今後の課題を検討すべきである。そこでまずは、椋山女学園にとどまらず、椋山女学園をとりまく名古屋の女子教育について整理検討したい。研究方法としては、現在名古屋市内に存在している中等教育機関・高等教育機関のHPを検索し、特に旧制の女学校に由来する学校を中心にその沿革を整理していく。

1. 日本における女子中等教育の制度的変遷

まずは、日本における女子中等教育の制度的変遷について概観してみる。日本の近代教育制度は、1872(明治5)年の「学制」により成立していく。それまでの人材育成の機関は、江戸時代における武家の教育を行っていた「藩校」や「学問所」、庶民の子弟の教育の場であった「寺子屋」などがあり、いまでいう「学校」的な教育の場として存在していたことは周知のとおりである。しかしながら、封建社会の中で女子には男子のような教養

* 人間関係学部 人間関係学科

を身につける必要がないとされていた時代であり、武家の子女は「女大学」などの女子のための教訓書により家庭内で教育され、寺子屋に通う子どもの多くは男子であった。

明治以前の女子教育は主として家庭内で行われ、家庭外での教育における内容も、「読み・書き・算」や手習いよりも、裁縫、活け花など家庭内の女子・妻としての礼儀作法などの「女子的教養」であった。しかし、幕末になるにつれ、家庭外での女子教育の場が増えてきたこと、寺子屋で学ぶ女子も増加していった状況は、女子教育機関の必要性が高まっていったと言える。

明治維新後、日本における教育制度が確立していく中での女子中等教育に関する制度的変遷について概観していく。学制発布前の1871（明治4）年、文部省が官立の女学校を東京に設置することを布達し、東京女学校の前身である「官立女学校」が設立され、1872（明治5）年に「東京女学校」と改称して開校される。入学年齢は、8歳～15歳までとあり、開校当初は、初等教育と区別した中等教育機関という意味合いは薄かったとされている。1872（明治5）年の「学制」では、中学校以上における女子教育についての方針は出されず、「中等教育機関が女子のためにも必要な時期に到達したならば、中学校に準じて制度化する方針であったと考えられる」（文部科学省『学制百年史』）とある。学制後の1875（明治8）年に、東京女学校は、入学年齢を14歳以上～17歳以下に教則を改正し、それは女子中等教育機関の設立を意図したものであるとされている。このように、日本における女子中等教育機関は東京女学校を端緒としている。

その後、1874（明治7）年「東京女子師範学校」が設立されたことにともない、東京女学校は1877（明治10）年に廃校となる。1882（明治15）年、「東京師範付属高等女学校」が設立され、女子の中等学校に「高等女学校」の名称を用いられることになった。規定上の最初に使用されたのは1891（明治24）年「中学校令改正」においてである。

1886（明治19）年に「師範学校令」が出されると、女子の中等教育機関は、「女子師範学校」と「高等女学校」とに制度上区分されることになる。また、1890（明治23）年「女子師範学校」から、中等学校の教員を養成する教育機関として「女子高等師範学校」が独立して開設され、それが女子の高等教育のはじまりと言われている。

1897（明治30）年の「師範教育令」と1899（明治32）年の「高等女学校令」によって、「女子師範学校」が教員養成のための教育機関、「高等女学校」が女子に対する普通教育および家政を中心とした実務教育を実施するための教育機関として制度化された。ここに、「高等女学校」には普通教育と実務教育という二つの教育課程が成立することになるが、「高等女学校の実科は男子の場合の実科中学校とは異なって、家政を主として婦人としての実務教育を施すもので、男子の場合の実業要項を加える方針とは著しい差異がある。なお、これを地方の生活に即応する簡易な女子中等教育施設とし、高等小学校に附設することも認めたのであって、中等教育普及のための一つの方策とした」（文部科学省『学制百年史』）。このように、明治30年代前半において、女子中等教育機関は独立した学校令のもとに、設置運営され、教育内容も整備されることとなり、各地における高等女学校の増設など著しい振興をみせたのである。

2. 名古屋における女子中等教育の歴史

女子中等教育の誕生

明治時代になり、小学校教育が整備されたのちに、いわゆる旧制の中学や女学校が整備されてきたが、その時代においては、中学校と女学校では明らかにカリキュラムが違っており、男女が平等に教育を受けられたわけではない。とはいうものの、女学校などは女性に対する教育の場をそれなりに提供していたと思われるので、名古屋の女学校について、整理してみる。ただし以下の表には、いわゆる高等女学校には該当しないものも含まれる。また、設立年はそれぞれにつながる現在の高等学校などのホームページなどで確認した一番古い年を記載し、古い順に並べてある。現在名称を変えて存在している学校についてできるだけ網羅するよう努めたが、ホームページからの検索のみでは限界があり、ルーツをたどれなかった学校については欠落しているものもある。よって、これだけが当時の名古屋における女子教育のすべてではないかもしれないが、少なくともこれらの学校は存在していたということである。

表1 名古屋の旧制女学校

| 現在の学校名 | 旧校名 | 設立年 | 現在の 設立主体 | 開校時の 設立主体 |
|----------------------------|---------------|-------------|-------------|--------------|
| 金城高等学校 | 金城女学校 | 1889年 明治22年 | 私立 | 私立 |
| 名古屋市立菊里高等学校 | 愛知県名古屋高等女学校 | 1896年 明治29年 | 市立 | 市立 |
| 愛知県立明和高等学校 | 愛知県立高等女学校 | 1903年 明治36年 | 県立 | 県立 |
| 桜花学園高等学校 | 桜花義会看病婦学校 | 1903年 明治36年 | 私立 | 私立 |
| 愛知淑徳高等学校 | 愛知淑徳高等学校 | 1905年 明治38年 | 私立 | 私立 |
| 至学館高等学校 | 中京裁縫女学校 | 1905年 明治38年 | 私立 | 私立 |
| 椙山女学園高等学校 | 名古屋裁縫女学校 | 1905年 明治38年 | 私立 | 私立 |
| 名古屋経済大学市邨高等学校 | 名古屋女子商業学校 | 1907年 明治40年 | 私立 | 私立 |
| 名古屋市立向陽高等学校 | 名古屋市立第二高等女学校 | 1912年 大正1年 | 市立 | 市立 |
| 愛知県立名古屋西高等学校 | 愛知県立第二高等女学校 | 1915年 大正4年 | 県立 | 県立 |
| 名古屋女子大学高等学校 | 名古屋女学校 | 1915年 大正4年 | 私立 | 私立 |
| 名古屋経済大学高蔵高等学校 | 名古屋第二女子商業学校 | 1923年 大正12年 | 私立 | 私立 |
| 愛知県立旭丘高等学校 | 名古屋市立第三高等女学校 | 1924年 大正13年 | 県立 | 市立 |
| 啓明学館高等学校 | 愛知女子商業学校 | 1924年 大正13年 | 私立 | 私立 |
| 愛知県立愛知商業高等学校 愛知県立瑞陵高等学校 | 愛知県実務女学校 | 1940年 昭和15年 | 県立 | 県立 |
| 瑞穂高等女学校 | 愛知みずほ大学瑞穂高等学校 | 1940年 昭和15年 | 私立 | 私立 |
| 名古屋市立桜台高等学校 | 名古屋市立第四高等女学校 | 1945年 昭和20年 | 市立 | 市立 |

(出所：各高等学校HPより作成)

この表からわかるように明治期に8校の学校が開校¹⁾している。さらに大正期に6校、昭和に入ってから3校開校している。また、これらとは別に、1894(明治27)年には愛

知医学校看護婦養成所，1898（明治31）年には保^ほ婦^ぼ養成所，1912（明治45）年には愛知県女子師範学校が開校している。1931（昭和6）年には，名古屋市民病院附属看護婦養成所が開校している。

女子中等教育の変遷

しかし，名称などからもわかるように明治・大正期の特に私立学校は，裁縫（和裁）学校が多かった。名古屋女学校の創立者の一人の越原春子氏は，名古屋帯の考案者としても知られている。金城女学校や愛知淑徳女学校のように必ずしも裁縫に力を入れていたわけではない学校もあったようだが，学びの中心はそれらの実技であった。明治の末頃になって，ようやく商業学校が誕生する。また，昭和に入ると，1927（昭和2）年に金城女子専門学校が，1930（昭和5）年には，椋山女子専門学校が設立され，女子のためのさらなる教育の場が拡充していった。戦時体制に入ってから設立された，愛知県実務女学校は，まさに銃後を支える女性の実務教育に主目的がおかれ，即座に実践的な力を習得することが期待されていた。そのために5年制ではなく，3年で教育を終えるようになっていた。

また，戦時下に入り兵力の増強の必要から，商業学校の生徒が動員されはじめ，また，商業学校の工業学校や農業学校への変更がせまられるようになった。どうしても変更できない商業学校については，女子の入学を認めることとなった。その結果中京商業学校や享栄商業学校は女子商業学校に転換されたが，男女共学というわけではなかった。

3. 名古屋における戦後の女子中等教育

男女共学で学ぶ公立新制高等学校

戦後の学制改革により，新制中学がスタートするとともに，名古屋にも新たに公立の中学校が設置され，また男女共学化に従い女子もともに中学校に進むことになった。カリキュラムもスタート時は，男女同様のものであった。のちに，家庭科については，技術科が新設されたことにより，女子のみの履修へと変化していった。その後，女子差別撤廃条約の批准に向けて，男女平等のカリキュラム設定の必要が生じ，現在では家庭科も技術科も男女ともに学ぶことになっている。

1948（昭和23）年4月の学制改革によりスタートした新制高等学校についても，男女共学になり，男子学校であった旧制の中学などを母体とする新制高校に女子も入学できることとなった。また，旧制の女学校が転じた新制高校にも男子も入学することとなった。しかし，愛知県名古屋高等女学校から転じた菊里高等学校においては，男子生徒の入学が少なく，男女クラスと女子クラスが存在したという。3年間女子クラスだった生徒は共学校に通っていたというより女子校に通っていたようだという。旧制の中学校から転じた高等学校も同様に女子生徒の入学は少なく，男女混合クラスだったゆえに，学年によっては女子生徒が一クラスに一割程度だったという。

このような実態だったとはいえ，公立高等学校では男女共学がスタートした。しかし，これは主に，東京以西に限られており，東京より東の地域においては，今なお公立の男女別学校が存在する。また，静岡県のように名目的には共学になったものの，実質的には女学校から転じた多くの高等学校が近年まで女子だけのままであったところもある²⁾。近年ようやく東京以東の公立高校においても共学化が図られるようになったところもある。

戦後に次々と開校された高等学校は、スタート時から男女共学だった。たとえば1953(昭和28)年には、愛知県立熱田高等学校が開校している。1969(昭和44)年に名古屋市立緑高等学校ができた。1974(昭和49)年には名古屋市立富田高等学校、1978(昭和53)年に名古屋市立山田高等学校、1984(昭和59)年には名古屋市立名東高等学校³⁾ができた。

男女別学で学ぶ私立新制高等学校

しかし、名古屋における多くの私立中学校・高等学校は男女別学で、それは、女学校のみならず旧制中学校であった学校も同様であった。名古屋において、新制高等学校への移行にともなって共学化した私立高等学校は前述の享栄商業高等学校(現在の享栄高等学校)のみであった。中京商業高校(現在の中京大学附属中京高等学校)は、戦後男子校に戻った。愛知県に広げてみても、新制中学校・高等学校への移行にともなって共学化した私立学校は享栄高等学校以外では滝中学校・高等学校だけであった。

旧制の南山中学校を母体に、1947(昭和22)年4月、新制の南山中学校(男子校)が設立された。さらに翌1948(昭和23)年4月に、新制南山高等学校(男子校)と中学校女子部が開設され、1951(昭和26)年には、南山高等学校女子部が開設され、従来の南山高等学校は同校男子部となった。このように、南山高等学校は、旧制の男子中学校をルーツにするものの、女子の中等教育機関にもなったわけであるが、男子部と女子部の併設であり、敷地と校舎も別の場所にあり、交流もほとんどなく、別学のままで今に至っている。1963(昭和38)年には、名古屋商科大学附属高等学校(現在の名古屋国際高等学校)も女子部を併設し、男女併学となった。名古屋国際高等学校は現在では、男女共学の学校になっている。

戦後に新たな私立の女子中学校高等学校も開校している。1948(昭和23)年に愛知女子工芸高等学校が開校している。しかし、この学校は1961(昭和36)年には愛知工芸高等学校になり、のちに東海工業高等学校、現在では愛知産業大学工業高等学校という名の男子校になっている。1949(昭和24)年には聖霊中学校、1952(昭和27)年には聖霊高等学校が開校しているが、現在では聖霊中学校・高等学校は名古屋市内ではなく瀬戸市にあり、南山学園の学校となっている。1962(昭和37)年には東海女子高等学校が開校した。東海女子高等学校は現在では共学校になっている。

私立高等学校の男女共学化

1955(昭和30)年代以降、男女共学の私立高等学校が名古屋にも開校した。1958年開校の東海同朋大学附属高等学校(現在の同朋高等学校)と日本福祉大学附属立花高校(現在の日本福祉大学附属高等学校)である。

その後少子化の影響で生徒数が伸び悩むにつれ、多くの男子校が共学に踏み切った。1992(平成4)年には、愛知工業大学名電高等学校の普通科が男女共学に、2002(平成14)年には専門学科も加え全科が男女共学になった。1998年には、前述の中京大学附属中京高等学校が男女共学になった。1999(平成11)年には名城大学附属高等学校普通科特別進学クラスが共学になり、同校普通科は2003(平成15)年に総合学科は2004(平成16)年に共学になった。1999(平成11)年には名古屋大谷高等学校も男女共学になった。2005(平成17)年には、愛知高等学校が共学になった。このように女子の中等教育機関は拡充していった。その一方で、女子校が男女共学になるところも出てきた。2005(平成17)年には中京女子大学附属高等学校が至学館高等学校と名称を変更し男女共学校になった。

高等学校における男女平等教育

その結果、2013（平成25）年現在、名古屋市内には、国立の中学校2校、名古屋市立の中学校109校（養護学校を含む、分校を除く）、私立の中学校が13校ある（養護学校を含む、民族学校・インターナショナルスクールを除く）。私立中学校のうち共学校が6校、女子校が5校、男子校が3校（南山中学は、男子部女子部を2重に数えている）で、むしろ、女子児童の方が選択肢はたくさんある。また2013（平成25）年現在名古屋には、名古屋市内に70校の高等学校があり（養護学校を含む、民族学校・インターナショナルスクール、通信・単位制の学校は除く）、そのうち国立の高等学校は1校、県立の高等学校は24校、市立の高等学校は18校、私立高等学校は27校である。私立高等学校のうち、女子校は7校、共学校は16校、男子校は5校（南山高等学校は、男子部女子部を2重に数えている）であり、高等学校においても、女子生徒の方が学校を選択肢は多い。

よって、女性の教育の場がなかったあるいは少なかった時代と比べると多くの選択肢が存在するようになり、女性のための教育の場が拡充してきたということは言える。しかし、ただ単に数合わせのための共学化だとしたら、教育の場としてはいかがなものだろうか。女性の教育の場として、共学と別学双方のメリット・デメリットが考えられる。公的な教育機関における男女共学は、男女共同参画の視点からも当然のことではあるが、私立の学校においてはその教育の理念に基づいて男女別学を良しとしてきた理由もあったはずである。経営上の理由など様々な理由があるとは思われるが、男女ともにより良い教育の場を提供するという観点からの再考も必要だと思われる。第二波フェミニズム運動が華やかにし頃には、アメリカにおいては女子に対する教育の場としての女子校に疑問の目が向けられたものの、昨今においては女子校ゆえのメリットも主張され、女子教育の場としての女子校が見直されている。将来的には性別で分ける必要がなくなることを期待したいが、現状においては女子校の女子教育に果たす役割はまだまだ大きいと思われる。しかしながら、女子校ゆえに旧態依然とした良妻賢母教育がなされるならばそれはまた問題であろう。これらの共学化に踏み切った高等学校の教育の質について、検討するとともに、男女別学を踏襲している学校についても、別学か共学かということだけでなく、教育内容が男女平等教育になっているかどうかについても検討していく必要がある。

4. 名古屋における戦後の女子高等教育（短期大学）

名古屋における女子中等教育の変遷をみてきたが、本節では、戦後女性にも解禁された高等教育についてみていく。戦前においては、女性は旧制高等学校や帝国大学に入学することができず、女性に対する高等教育機関はほとんどなかった。特に名古屋においては、女性が高等教育を受ける場は名古屋市立女子高等医学専門学校しかなかったが、戦後は女性の大学への入学が可能になった。しかしながら、戦後発足した短期大学が隆盛をきわめ、主に女性の学びの場は短期大学が中心となっていった。名古屋市立や愛知県立の短期大学が設立された。さらには、戦前からの中等教育の歴史のある私立学校が相次いで短期大学を設立した。加えて、洋裁学校を祖とする学校も短期大学へと変わっていき、女性の学びの場を提供した。しかしそれらの学校の多くは、家政系・保育系もしくは教養としての文学系に偏っていた。女性のキャリア形成特に職業キャリアを意識したものは少なかったと

言えよう。

公立の短期大学では、1947（昭和22）年に国文科と英文科からなる愛知県立女子専門学校が設立され、のちに短期大学に改組されている。1950（昭和25）年には名古屋市立の名古屋女子短期大学が開校している。経済と生活と被服の3科からなっていた。1953（昭和28）年には名古屋市立の保育短期大学が開校している。女子学生対象の学校であった。1978（昭和53）年には、愛知医学校看護婦養成所から発展してきた学校が名古屋大学医療技術短期大学部看護学科となった。さらに名古屋市民病院の附属高等厚生女学校が、1991（平成3）年には名古屋市立大学看護短期大学部となった。

私立については、前述の旧制の女学校から短期大学に発展したものについてまず概観してみる。1950（昭和25）年に金城学院大学短期大学部が開校している。学科は文科と家政科の2つであった。同年には名古屋女学院短期大学（家政科）と中京女子短期大学体育科家政科も開校し1953（昭和28）年には保姆養成所から発展した柳城女子短期大学が開校している。1955（昭和30）年には桜花学園が名古屋短期大学保育科を開校している。1961（昭和36）年には、愛知淑徳短期大学が、1965（昭和40）年には市村学園短期大学商経科家政科が開校している。1969（昭和44）年には椋山女学園大学短期大学部文学科が開校している。

洋裁学校からの改組も進み、1950（昭和25）年には、山田家政短期大学が、1963（昭和38）年にはすみれ女子短期大学（服飾科）が開校している。さらに、1964（昭和39）年には東海学園女子短期大学（家政科・英語科）が、1970（昭和45）年に名古屋聖霊短期大学が開校した。共学の短期大学としては、1950（昭和25）年開校の名城大学短期大学部（商経科・電気科・機械科）などがあったが在学生のほとんどは男子学生であった。1965（昭和40）年には東邦学園短期大学（商業科）が開校した。開校当時は男子学生が圧倒的多数であったが、のちに逆転し女子学生が大多数となった。

このように、女子の高等教育機関が増えていったが、主に短期大学を中心としたものだった。しかし、金城学院や椋山女学園のように短期大学に先駆けて4年制の女子大学を開校したところもあり、また、多くの短期大学が4年制大学に改組し、学部も充実させていく。それにともない、短期大学の共学化や閉鎖もあいついだ。すみれ女子短期大学は1981（昭和56）年に愛知女子短期大学に名称変更し、1988（昭和63）年に日進市に移っている。この日進キャンパスの隣地に1988（昭和63）年に名古屋外国語大学が開校され、2002（平成14）年には名古屋学芸大学も開校された。これらの大学は共学校である。2014（平成26）年現在なお愛知女子短期大学は名古屋学芸大学短期大学部として女子校のまま存在しているが、定員は100名と減少している。2004（平成16）年には、山田家政短期大学から名古屋女子文化短期大学になっていた短期大学が名古屋文化短期大学になり、共学になった。東邦学園短期大学は2008（平成20）年に閉学し、現在は愛知東邦大学になっている。これらの移り変わりの結果、2013（平成25）年現在名古屋市内の短期大学は8校（名古屋文化短期大学、名古屋文理大学短期大学部、名古屋柳城短期大学、愛知みずほ大学短期大学部、愛知学院大学短期大学部、名古屋経済大学短期大学部キャリアデザイン学科、南山大学短期大学部、名古屋女子大学短期大学部、通信制のものは除く）、うち女子のみは南山大学短期大学部と名古屋女子大学短期大学部の2校のみである。以下にそれらの変遷を詳しくみていくこととする。

5. 名古屋における戦後の女子高等教育（4年制大学）

戦後の学制改革により、新制大学が誕生した。旧制の第八高等学校・名古屋帝国大学などが新制大学に変わり、1949（昭和24）年に名古屋大学が誕生するなど、名古屋においても多くの大学が誕生した。戦前の男性のための教育機関を改組した大学は、国公立のみならず私立のそれも男女共学となり、名古屋における女性の高等教育機関は飛躍的に増大した。名古屋において、戦前に女性の高等教育を唯一担っていたともいえる名古屋市立女子高等医学専門学校も1950（昭和25）年に名古屋市立大学の医学部となり、男女共学の学びの場となった。戦前の女子の中等教育機関であった学校も4年制大学を新設していくが、それらは女子大学となり、女子だけの学びの場となっていった。たとえば、椋山女学園大学（家政学部）が1948（昭和23）年に設立され、金城学院大学（英文学部）が1949（昭和24）年に設立された。椋山女学園大学と金城学院大学は、短期大学より先に4年制大学ができています。現在、椋山女学園大学のキャンパスは、名古屋市と日進市にある。1963（昭和38）年には、中京女子大学（体育学部）が開設された。2010（平成22）年に至学館大学と校名変更するとともに男女共学になっている。キャンパスは大府市にある。名古屋女子大学（家政学部）は1964（昭和39）年にできています。愛知淑徳大学（文学部）ができたのは、1975（昭和50）年であった。愛知淑徳大学は1995（平成7）年に男女共学に移行している。現在のキャンパスは名古屋市と長久手市にある。1979（昭和54）年には市邨学園大学（経済学部）が開学し、1983（昭和58）年の名古屋経済大学に校名変更と同時に男女共学になっている。現在名古屋経済大学のキャンパスは犬山市にある（大学院法学研究科・会計学研究科と短期大学部キャリアデザイン学科は名古屋市内のサテライトキャンパスにある）。1998（平成10）年には、桜花学園大学が開校しているが、現在キャンパスは豊明市にある。

公立の短期大学も4年制大学に移行し、男女共学になっている。愛知県立女子短期大学は愛知県立大学になり、現在では長久手市にキャンパスがある。名古屋市立女子短期大学や名古屋市保育短期大学や名古屋市立大学看護短期大学部は、男女共学の名古屋市立大学になっている。名古屋大学医療技術短期大学部も男女共学の名古屋大学医学部保健学科になっている。

2013（平成25）年においては名古屋市内の公立4年制大学は、名古屋大学、名古屋市立大学、名古屋工業大学の3校、私立大学は16大学（通信制は除く）あり、うち女子大学は椋山女学園大学、名古屋女子大学、金城学院大学の3校のみである。

このようにして、名古屋における女性の学びの場はますます拡大し、近隣の市町村にも広がっていった。さらに各女子大学ともに学部を拡充し、たとえば椋山女学園大学は2014（平成26）年度入試では7学部、金城学院大学は5学部が学生募集をしている。しかしながらその専攻は、文学系・家政系に偏っており、かつての女子向け短期大学の学科構成と類似したものがある。女性の教育の場が拡大したとはいうものの、その分野はかなり限定的である。昨今では理系女子の教育の必要性が指摘されているが、少なくとも名古屋における女子大学においては、まだ旧態依然とした状態であるといえよう。理系とはいうものの、かつての家政系にルーツを持つ栄養学や、建築学、かつては女性職としてピンクカラーワークとも言われた看護師養成の看護学部、あるいは薬学部などもともと女性が

多かった分野の理系学部が、椋山女学園大学や金城学院大学、名古屋女子大学などの女子大学にも設置されているが、理工学部のような学部は名古屋の女子大学には存在しない。

6. 名古屋の女子大学における大学院の設置

4年制大学の中には、さらに大学院を設置するところも出てきた。男女共学の大学のみならず、女子大学も大学院を設置していく。修士課程のみならず博士課程も設けられていく。

すでに1967（昭和42）年には金城学院大学に大学院文学研究科修士課程が開設されている。1993（平成5）年には、大学院文学研究科博士課程が開設されている。2014（平成26）年現在では、2つの研究科に博士課程まで設置されている。椋山女学園大学では1977（昭和52）年に修士課程が1999（平成11）年に博士課程が開設されている。2014（平成26）年現在では博士課程は1研究科、修士課程は4つの研究科がある。名古屋女子大学は1998（平成10）年に修士課程を2006（平成18）年に博士課程を開設した。現在は共学校になっている愛知淑徳大学や名古屋経済大学も次々に大学院を開設した。もともとは男子のための教育機関だった大学にも大学院ができ、そこでも女性たちも学ぶことができるようになり、女性の学びの場は拡大してきている。

おわりに

戦前においては、名古屋には女子の教育機関は限られており、中等教育機関が17校程度、女子の高等教育機関にいたっては名古屋市立女子高等医学専門学校ぐらいしかなかったわけであるが、現在では女子が通うことのできる高校も増え、さらに男女共学大学・大学院もしくは女子大学・大学院において女性たちが学ぶことが可能になっている。女子大学の学部構成には偏りがあるとはいうものの、共学大学で学ぶこともできるわけであるから、女性の教育についての選択肢は拡大したということがいえるだろう。戦前に比べると隔世の感がある。

また、かつての女子大学が共学になっているところも出てきている。このような状況の中で、女子教育における女子のみ教育のメリット・デメリットについても検討をしていく必要があると思われる。

さらにこのたびは名古屋の女子教育に焦点を当てたがゆえに、名古屋から近隣の市町に拡大していった学校や、もともと名古屋市外にあった学校については、十分な検討をすることができなかった。市外から市内に通う例もあるが市内から市外の学校に通うということももちろんあるので、今後はせめて県内にまで地域を広げて女子教育の歴史を概観していく必要があると思われる。

加えてそれらの教育機関における教育内容・カリキュラムについても検討し、女性の能力をのばすために必要な学びの場・学びの内容について検討していきたい。

注

- 1) 椋山女学園高等学校につながる椋山第二高等女学校や、名古屋女子大学高等学校につながる緑ヶ丘高等女学校は、ともにさらに設立年の古い名古屋裁縫女学校、名古屋女学校のみ表記しているのが厳密に言えばさらに2校存在していたことになる。
- 2) 静岡県立沼津西高等学校のHPの「沿革」には、1949（昭和24）年に「男女共学を実施する」とあるものの、2003（平成15）年にも「男女共学を実施する」と記されている。静岡県内の旧制の男子中学にルーツを持つ高等学校は共学になったものの、女学校にルーツを持つ学校が名目上は男女共学になったものの、実質的には女子校状態にあった。ちなみに浜松市立高等学校が2005（平成17）年に男女共学になり、現在静岡県内の公立高校はすべて男女共学校になった。
- 3) 名古屋市立山田高等学校は、2013（平成25）年現在、名古屋市立高等学校18校（養護学校4校を含む）うちの二番目に新しい高等学校、名古屋市立名東高等学校が一番新しい高等学校である。

参考文献・引用文献

- 愛知県教育振興会『愛知県教育関係職員録・2013』2013年
佐藤実芳「愛知淑徳大学愛知県における男女共学の私立高等学校の発展—その1—第二次大戦後から昭和30年代まで」『愛知淑徳大学教育学研究科論集』第3号 2013年
椋山女学園大学『私のキャリアマップ』椋山人間学研究センター「女性論」プロジェクト 2011年
愛知みずほ大学短期大学部HP「沿革」<http://www.mizuho-c.ac.jp/amjc/school/history.html> 2014年9月14日最終閲覧
愛知学院大学HP「歩み」<http://www.agu.ac.jp/about/history.html> 2014年9月14日最終閲覧
愛知教育大学HP「大学の沿革」<http://www.aichi-edu.ac.jp/intro/outline/history.html> 2014年9月14日最終閲覧
愛知県立旭丘高等学校HP「旭丘高校の沿革」<http://www.asahigaoka-h.aichi-c.ed.jp/gaiyou/enkaku.htm> 2014年9月14日最終閲覧
愛知県立瑞陵高等学校HP「歴史」<http://www.zuiryo-h.aichi-c.ed.jp/contents/history.html> 2014年9月14日最終閲覧
愛知県立大学HP「沿革と特色」http://www.aichi-pu.ac.jp/university_summary/university_summary_history.html 2014年9月14日最終閲覧
愛知県立熱田高等学校HP「沿革」http://www.atsuta-h.aichi-c.ed.jp/annnai/annnai_index.html 2014年9月14日最終閲覧
愛知県立明和高等学校HP「明和の歴史」http://www.meiwa-h.aichi-c.ed.jp/102_history.html 2014年9月14日最終閲覧
愛知工業大学附属中学校HP「愛知工業大学附属中学校のあゆみ」http://www.aitech-j.ed.jp/html_data/corner0/ 2014年9月14日最終閲覧
愛知工業大学名電高等学校HP「沿革：発展の時代」http://www.meiden.ed.jp/HISTORY/history_1.htm 2014年9月14日最終閲覧
愛知淑徳学園HP「歴史と沿革」<http://www.aasa.ac.jp/gakuen/history/index.html> 2014年9月14日最終閲覧
愛知東邦大学HP「沿革」<http://www.aichi-toho.ac.jp/outline/intro/history.html> 2014年9月14日最終

名古屋の女子教育の変遷

閲覧

- 越原学園HP「学校法人の沿革」<http://www.koshihara.nagoya-wu.ac.jp/about/enkaku.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 金城学院HP「沿革」<http://www.kinjo-gakuin.jp/content/about.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 至学館大学HP「学園の歴史」<http://www.sgk.ac.jp/gaiyo/rekisi.html> 2014年2月14日最終閲覧
- 静岡県立沼津西高等学校HP「沿革」<http://www.edu.pref.shizuoka.jp/numazunishi-h/home.nsf/> 2014年9月14日最終閲覧
- 東海学園大学HP「沿革」https://www.tokaigakuen-u.ac.jp/about_us/history/index.html 2014年9月14日最終閲覧
- 同朋高等学校HP「沿革」<http://www.doho-h.ed.jp/about/> 2014年9月14日最終閲覧
- 南山学園HP「聖霊中学・高等学校 聖霊中学・聖霊高校のあゆみ」<http://www.seto-seirei-js.ed.jp/history/> 2014年2月14日最終閲覧
- 南山学園HP「南山高等・中学校女子部 創立と沿革」<http://www.nanzan-girls.ed.jp/establishment/> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋経済大学HP「沿革」<http://www.nagoya-ku.ac.jp/info/> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋国際中学校高等学校HP「学校沿革」<http://www.nihs.ed.jp/outline/outline.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋市立菊里高等学校HP「本校の歩み」<http://www.kikuzato-h.nagoya-c.ed.jp/> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋市立桜台高等学校HP「沿革」<http://www.sakuradai-h.nagoya-c.ed.jp/profile/enkaku.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋市立山田高等学校HP「山田高校の歩み」<http://www.yamada-h.nagoya-c.ed.jp/01goaisatsu/01goaisatsu.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋市立大学HP「名古屋市立大学の歩み」<http://www.nagoya-cu.ac.jp/1000.htm> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋市立富田高等学校HP「学校沿革」http://www.tomida-h.nagoya-c.ed.jp/sp_history.html 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋市立名東高等学校HP「校長挨拶」<http://www.meito-h.nagoya-c.ed.jp/Meito/c.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋市立緑高等学校HP「学校沿革」http://www.midori-h.nagoya-c.ed.jp/a-annai_frame.html 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋大学HP「歴史」<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/history-data/index.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋文理大学短期大学部HP「短期大学部の沿革」<http://www.nagoya-bunri.ac.jp/COL/information/history.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 名古屋柳城短期大学HP「柳城の歴史」<http://www.ryujo.ac.jp/summary/> 2014年9月14日最終閲覧
- 日本福祉大学HP「学園の沿革」<http://www.n-fukushi.ac.jp/about/gakuen/history/index.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 浜松市立高等学校学校案内浜松市教育委員会HP「沿革」<http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/ichiritsu-h/sub-menu/annai.html> 2014年9月14日最終閲覧
- 文部省『学制百年史』（文部科学省HP参照）